

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第十回）

「大伴旅人・望郷の歌」

↳ 「関門海峡・早鞆はやとむの瀬戸」と「大和（奈良）・吉野みやたきの宮滝」
はやひと せと いはほ あゆはし

隼人の 湍門たぎの磐も 年魚し走る

吉野の瀧たぎに なほ及かずけり

卷六―960 作者 大伴旅人

（解説）隼人の湍門（瀬戸）の巨岩も、鮎あゆの走り泳ぐ吉野の宮滝の激流の
光景にはやはり及ばない。

・この歌の題詞は「帥そち大伴郷の遥かに吉野とつみやの離宮を思ひて作る歌一首」と
なっているとところから大伴旅人が大宰帥ださいそち（大宰府長官）在官のところ大和・
吉野の宮滝を偲んだ歌である。

・歌の内容は「隼人の瀬戸」の景色よりも、やはり「吉野の宮滝」の景色
の方が勝れているという意味であり、この歌は大伴旅人が大宰府に於いて
筑紫（九州）の「隼人の湍門（瀬戸）」と、大和（奈良）の「吉野の宮滝」
を比較することによって、都を恋しく思う心を詠んだものであろう。

【早鞆はやとむの瀬戸せと】

・大伴旅人がこの歌で詠んだ「隼人の湍門（瀬戸）」については北九州市
門司と山口県下関間の関門海峡の最も狭い水路【早鞆の瀬戸】であるとの

説と「隼人」は薩摩の古名であるところから鹿児島県阿久根市とその西の海上にある長島との間の【黒ノ瀬戸】であるとの二つの説がある。

・滝口弘氏「九州の万葉」には【大日本地名辞書】に隼人の瀬戸は「門司市街の北端にして、埤頭はやひとに隼人神社あり、万葉集に、隼人の湍門せとの岩穂いはほとあるもここなるべし。」とあるのに従ってよいと思うとして関門海峡の

「早鞆はやとむの瀬戸せと」であると記している。早鞆の瀬戸の速い時の潮流は時速約18キロといわれ、鳴門海峡とともに急潮流でも広く知られた所である。

・また、「隼人神社」については【豊前国志】には「隼人神社、この社を和布刈めかり明神とも称す。」とある。

・古くに呼ばれた「隼人神社」は九州最北端の関門海峡で最も狭い場所の早鞆の瀬戸に面する北九州市門司区めかり和布刈めかりにある「和布刈神社」と伝えられる。この神社は社記によると、仲哀天皇九（200）年に創建された古社で江戸時代までは、「隼人社」とか「速戸社」と呼ばれていたとある。

また、この神社には、奈良時代の和銅三（710）年に和布刈神事のおわめを朝廷に献上した記録が「李部王記」という古書に残されているという古い神事が伝えられ、福岡県の無形民俗文化財に指定されている。

・滝口弘氏【九州の万葉】には「関門海峡の早鞆の瀬戸は、昭和初年までは兩岸に大岩が累積し、潮の流れる時は奔流が潮しぶきをあげ、至る所に大渦を巻いて流れる有様は壯観で、そのために、小船はもとより、大洋を航行する大船も警戒して一時停船する程であったが、航行を容易にし、航

路の安全のために両岸の大岩は取り除かれて、岸边まで深く浚渫され、近代的な護岸工事が施されて、潮流の速いことはかわらないが、潮しぶきをあげる瀬戸の岩はほぼ見ることができなくなった。」と述べている。



和布刈神社（北九州市門司区）から早鞆の瀬戸と神社前の海にわずかに残る岩の上の燈籠。
真上に海峡の潮流をまたぎ対岸の下関市へダイナミックに延びる関門橋（全長1,068m）を望む。

・この歌は「六十歳を越して大宰帥となった大伴旅人が、大宰府で愛妻を失くし、老いと孤独の寂しから、故郷の奈良を懐かしく、恋しく思う心を歌に託して、九州の門戸であり、両岸に大岩が累積した景勝の地である上に、潮流の速いことで知られた早鞆の瀬戸を吉野の宮滝（奈良県）と比較して詠んだものであろう。」と云われている。（滝口弘「九州の万葉」参照）

・「早鞆の瀬戸」は関門海峡東端、山口県下関市壇ノ浦と福岡県北九州市門司崎の間の水路（幅630m）である。この水路には歴史上有名な源平合戦の古戦場を有し、また、海底に昭和33（1958）年3月には国道トンネルが完成。（全長3,461・4m「人道―海底部780m」も備える。）さらに水路の真上には昭和48（1973）年に開通した関門橋（長さ1068m）が本州と九州を結ぶ大動脈として現在も重要な役割を

果している。

・「早鞆の瀬戸」が位置する関門海峡は、下関（山口県）と門司（北九州市）の間にある海峡ということであるが、門司にとどまらず北九州市と下関市に挟まれた海峡を指している。

・北東方向に走るこの海峡は、瀬戸内海・周防灘と日本海・響灘という二つの海をつなぎ1日平均約700隻の船が通過する本州と九州を結ぶ海上交通の要衝でもある。この海峡は古代から都と「遠の朝廷」と呼ばれた大宰府を結ぶ海路の要衝であったが潮の流れが激しく一番の難所であった。

（関門海峡・早鞆の瀬戸）古川薫著参照

（写生地）

万葉集に詠われている隼人の湍門（今の早鞆の瀬戸）に面する【和布刈神社】はJR門司港駅から約2km離れた北九州市門司区和布刈の地に在り、この神社へは門司港駅からはバスあるいはトロッコ列車（季節・曜日限定）が運行している。

神社前の関門海峡（早鞆の瀬戸）の潮流は、満潮のとき周防灘から響灘にむかう西流れ、干潮のとき逆の東流れとなって、流速ゼロから最高10ノット（時速約18キロ）に達し一日四度、その流れの方向を変えている。

干潮時、満潮時には大きな音をたてる激流となりその流れに向かう小船は喘ぎ喘ぎ航行しているように見えた。

・この神社の境内に立つと目前に古代に都と「遠の朝廷」と呼ばれた大宰府を結ぶ海路であり、また源平合戦の古戦場であったという歴史を有する関門海峡と真上にはダイナミックな関門橋が望め、古いにしえと今という時間の狭間はざまを感じるところである。

☐和布刈神社境内から潮の流れの速い「関門海峡・早鞆の瀬戸」と海峡を隔てた対岸には、かつて山頂に敵の襲来を都に知らせるための狼煙台のろしが設けられたことに由来する「火の山（標高268m―下関市椋野町）」などを描く。

（池田杏花）



【吉野の宮滝】

・大伴旅人が「隼人の瀬戸」と比較して詠った「吉野の宮滝」は近畿日本鉄道吉野線「大和上市」かみいちから吉野川に沿って約6 km上流にある奈良県吉野郡吉野町宮滝のことであり、この地には「日本書紀」斉明2年（656）是歳の条に「吉野の宮を作る」とあり以来、天武・持統・文武・元正・聖武の各天皇にと引き継がれた吉野離宮跡と伝えられる地である。

（註）離宮は皇居や王宮以外の地に定められた宮殿。

・なお、この宮滝から桜で有名な吉野山へは南へ約4 kmの山道を登る。

☐大宰府で大宰帥・大伴旅人が望郷の歌を数多く作っているがその望郷の対象地は旅した吉野と故郷明日香（奈良県）への慕情が中心であった。

・大伴旅人が吉野宮滝へ旅した時に詠った歌に次の歌がある。

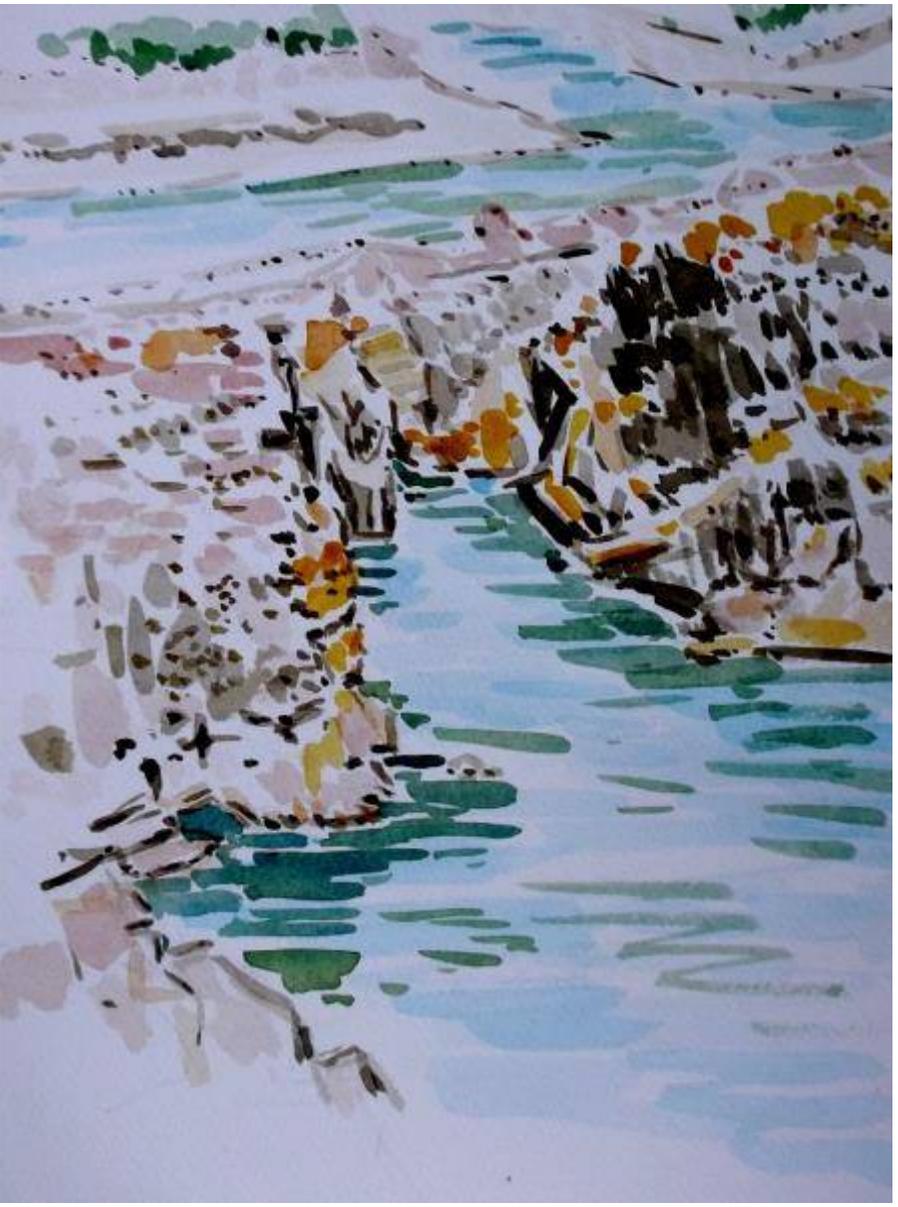
「暮春の月に、吉野の離宮とつみやに幸す時に、中納言大伴郷、勅みことりを奉りうけたまはて作る歌」（卷三―315）である。この歌は大伴旅人が大宰帥（大宰府長官）として赴任する以前の中納言時代の神亀元（724）年3月に聖武天皇の吉野離宮行幸に伴った時に、詠じた歌である。

☐大伴旅人が大宰府で作ったこの望郷の歌（卷六―960）は、聖武天皇

の吉野離宮行幸に伴した時などで見た吉野宮滝の景色を望郷の思いと重ね合わせて詠った歌であろう。この歌で「隼人の瀬戸」と比較され詠まれた「吉野の滝」は吉野宮滝を流れる吉野川を指すが、吉野川はこの地まで川幅が広く悠然たる流れであるが、この吉野宮滝では兩岸に奇岩怪石や断崖絶壁となり、激流渦巻くとみれば深い淵が淀むという峡谷美を作っている景勝の地である。

(写生地) 吉野宮滝の奇岩怪石の間を曲折しながら流れる吉野川を描く。

(池田杏花)



・「奈良・吉野川」は奈良・三重県境の大台ヶ原山に発源、奈良県の中央部、和歌山県の北部を西流、紀伊水道に注ぐ川で奈良県内の部分は「吉野

川」和歌山県内の部分は「紀ノ川」と呼ぶ。

(参考文献等) 滝口弘「九州の万葉」・「万葉集・新潮日本古典集成」・「万葉集・日本古典文学大系」
「北九州教育委員会・解説」等。